

グアテマラ先住民リーダーが本学などで「農業」「地方自治」「女性と政治」研修

中米グアテマラから先住民のリーダーたち12人が来日。11月10日から30日間にわたって、専修大学や広島県、長野県の研究機関や農家などを視察。狐崎知己経済学部教授が中心になって指導にあたり、日本の農業や地方自治、女性の社会進出などを多岐にわたって研修した。



一行は、狐崎教授をコースリーダーに国際協力機構（JICA）が企画した第3回特別研修の参加者。キチエ県サンバルトロメ・ホコテナンゴ市長のベニート・バルトロ・シトイさん、サンマルコス県イシュチワン市開発企画室長のジョセニア・マリソル・コボさんから市長や女性活動家ら有力メンバー。

▲すぐに打ち解けあった笑顔のグアテマラの研修生と狐崎ゼミ生＝生田キャンパスで

JICAでは、長期にわたる内戦の戦禍からの復興を目指すグアテマラで、先住民の開発リーダーを育成するのがねらい。他のメンバーで2005年秋に第1回、07年春に第2回が実施され今回が最終。3年間で約30人の先住民の開発リーダー育成を目指す。このプロジェクトを企画し、コースリーダーを務めたのが狐崎教授。同国の民主化定着プロジェクトを推し進めている。

第3回研修では、農村開発、地方行政、女性の政治参加、エコツーリズム、アイヌとの交流などをテーマにした。長野県伊那市では村の財政危機を立ち直らせた女性村長や地元の農産物を生かし加工品に売り出した女性社長から話を聞き、ユニークな農産品の直売などを視察。中南米原産の雑穀で栄養価の高さで日本でも注目を集めているアマランサスの栽培や販売、加工も学んだ。

本学では狐崎教授をはじめ原田博夫教授、飯沼健子准教授ら経済学部の教員の講義を聞いた。

伝統的な民族衣装を身にまとい、ひたむきに学び打ち解けて話しかけてくる研修生は、各地で大歓迎を受けた。11月16日、生田キャンパスでの原田教授の講義を受けたあと狐崎ゼミの学生たちと交流。学生に民族楽器を紹介し、スペイン語と笑い声が生田キャンパスに飛び交った。

過去2回の研修でも視察に訪れた道の駅「ふおレスト君田」（広島県三次市）では、「ぜひ皆さんが栽培したコーヒーを」とグアテマラ産のコーヒーを販売する計画を立てている。

多民族国家グアテマラは、36年間にわたり20万人以上が虐殺の犠牲になった内戦が終結してから11年。戦後も政治腐敗、貧富の格差、治安の悪化、先住民における女性差別など課題は山積。復興への道は険しい。

昨夏グアテマラ本国で行われた総選挙では、第2回研修の参加者の中から2人の市長が誕生（一人は再選）。ウエウエテナンゴ県サンファンイシコイ市長に初当選したサトゥルニノ・フィゲロアさんは次のように抱負を語っている。「研修では、人々の意見に辛抱強く聞き、問題を分析する姿勢を学んだ。市民が抱える問題に耳を傾け、尊厳のある暮らしを実現したい」。

狐崎教授は「グアテマラでは、地方からの再生が復興のカギ。日本の戦後の経済復興や各地のさまざまな農業開発の成功例を学んだ研修生が、本国で成果を具体的に発揮する日が必ずくるだろう。10年先を見据えて取り組む姿勢で次代にもつなげ、仕組みを作っていくことだ」とプロジェクトでの確かな手応えを感じ、今後を期待している。

アンドラ公国から来日のメリチェイさん

「子供のころからの夢」かなう

秋期日本理解プログラムに参加した短期留学生、メリチェイ・ボラさん(アンドラ公国)に日本の印象を聞いた。

秋のプログラムではJ2クラス(中級)で日本語を勉強しました。親切な先生や専大生に囲まれ、引き続いて受ける冬と春のプログラムではさらにレベルアップしていきたいです。

生まれはフランスとスペイン両国の間にある小さなアンドラ公国。ピレネー山脈の高峰に抱かれ、スキーや山登りの名所があります。関税がないため免税品を求めて多くの観光客が訪れます。

フランスの大学を卒業し現在、スペインのバルセロナ大学大学院でアジア学を研究しています。ヨーロッパとはまったく違った文化と歴史を持つアジア、特に日本には、子供のころから興味を持ち、来日は夢でした。ですから毎日が新鮮で刺激的。三菱や三井グループなど財閥系企業の歴史的背景に興味を持っています。日本でその分野を深めることができれば、と思います。

母語のカタロニア語に加え、フランス語、スペイン語を話します。「日本語も」と胸を張って言えるように早くなりたいです。



▲ 振袖姿のメリチェイさん

インドで農村開発研修 住民参加の重要性を体験

「NGO論」受講の近藤祐市さん(経済4)

「途上国の貧困問題で自分ができることはなんだろうか」。そんなテーマを持ち経済学部国際経済学科「NGO論」(狐崎知己教授)を受講中の近藤祐市さん(4年次)は昨夏、インドでの国際協力研修を体験。住民参加型開発の重要性を学んだ。

訪れたのは南インドのマドゥライの農村部。農村専門開発ワーカーを育てる現地NGOのプログラムに参加。他の参加日本人学生ら19人とともに、同地区で問題になっている水の配給問題に取り組んだ。利権がからんでいる水タンクの管理を住民側に置くシステム作りをどう構築したらいいか、住民とともに考え、「開発とは誰かにされるものではなく、住民主体で行うもの。そのバックアップには、相互の信頼関係が重要である」という結論にたどり着いた。

実践的な「NGO論」を受講したくて専大に入学したという近藤さん。「活力あふれるインドで大学院に進学し、農村開発や国際関係の分野に進みたい」という進路を確認し、その「一歩」を踏み出す旅にもなった。

研修の様子は、南インド地域を拠点にする新聞のトップ面に大きく紹介されるといふ「思い出」も。乗車したバスの見知らぬ乗客から「あなたたちの活躍の様子を新聞で見たよ」と声をかけられたそう。

※NGO論＝国際開発協力に取り組むNGO(非政府組織)の歴史、理論、活動事例や課題、調査研究の手法などを学ぶ。休暇中にはNGOが主催する海外のスタディーツアーに参加。NGOを内と外から理解する。



▲近藤祐市さん



▲活動の様子は現地の新聞に

2件の「国際交流特別講演会」開催

ワイカト大のリム、ストラット両客員教授講演

国際協定校の客員教授が英語で講義をする第133回国際交流特別講演会・シリーズ「やさしい英語による経済学講座」(全5回)が生田キャンパスで11月17日から12月15日まで開催された。

講師はニュージーランドのワイカト大学のスティーブン・リム経済学科教授。古美術品などが、社会にどのような経済的役割を果たしているかを探った。毎回盛況で、聴講者から質疑が活発に寄せられた。



▲講義するリム教授

また、12月18日には第134回同講演会が生田キャンパスで開かれ、ワイカト大学のアンナ・ストラット博士(経済学部准教授)が「アジアの発展途上国における貧困問題」をテーマに講演。学生40人が聴講した。

セクハラ防止委員会から

あなたもセクハラしていませんか？

「セクハラなんてしたことないし、自分とは関係のない問題だ」——このコラムを読んでいるほとんどの人は、そのように考えているのではないのでしょうか。新聞の紙面でセクハラに関する記事を目にしても、それは他人事であり、自分の胸に手をあてている人は少ないと思います。しかし記事になるのは氷山の一角にすぎず、「セクハラといわれても仕方のない行為」は無数に存在しているのです。

この問題がなくなるのは、「セクハラ行為＝新聞記事にある行為」として受け止められているからではないでしょうか。セクシュアル・ハラスメントは「相手の意思に反して不快や不安な状態に追い込む性的なことばや行為」と広く定義されており、気づかないうちに、セクハラにつながる行動をしていることもあるのです。次の項目は、セクハラ防止のためのチェック項目です。ふだんの何気ない会話や行動がセクハラに結びついていないか確認してみてください。(1) 家族が隣にいても、同じ行動(言動)がとれる。(2) その行動(言動)がインターネットに掲載されても構わない。(3) 相手が先輩(上司)の家族であっても、同じ行動(言動)がとれる。(4) 自分の家族が、他の誰かから同じ目にあっても構わない。

性に関する意識は男女や個人で大きく異なります。その場を盛り上げるためや単なるジョークのつもりでも、相手の許容範囲を超えれば不快な思いにさせてしまうのです。これまでのコミュニケーションのとり方に問題がなかったか、振り返ってみることも必要ではないでしょうか。

(岩崎俊彦)

「緑地帯」

刺激を求めて旅に出よう

4月上旬の朝方、まだ肌寒さの残るギリシャ・アテネの街でバスターミナルを捜して歩いたのは遠い昔、そう20代後半に差し掛かったころだった。国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊に参加し、中近東のシリア・アラブ共和国に赴任して1年が過ぎ、任国外の3週間研修に選んだ一つがギリシャだった。目的は、古代オリンピック発祥の地であるオリンピアを訪れることだった。アテネからバスに揺られて約4時間、怏々(おうおう)と茂る緑深い山の中にオリンピアの街はあった。バスを降り、近くの村人に場所を確認して聖地オリンピックの発祥地に自分の足を踏み入れた感動は、今でも忘れられない。

大学生時代は、比較的自由にいろんな経験をする事ができる限られた時間だ。クラブ活動、サークル活動、資格試験の勉強、アルバイト、友人たちとの他愛もなく過ごす時間など、すべてが大切な経験だ。その中で、国内外の旅行をすることも大切な経験だと思う。もちろん、海外に出れば危険も多い。パスポート、お金の管理に始まり、自分の身を自分で守るという当たり前のことを当たり前にしなければならない。海外では、どんな旅行であれ自分の身を守るという緊張感を忘れてはならない。しかし、この緊張感もまた日本を離れ海外に来ているということを実感する時でもあるのだ。

若い時に海外から日本を見る経験をすると、いろんなことを感じ、考える機会になると思う。試験期間が終われば、刺激を求めて日本を離れてみるのも良いかもしれない。

(学生部)